書評・紹介

Sathienkose: Fun Khwam Lang
（我が来しかた）
Vol. 1. IV＋513 pp. 1967, 45 Baht
Vol. 2. IV＋385 pp. 1968, 45 Baht,
Bangkok, Thailand.

1969年7月1日、物故したPhya Anuman博士の自叙伝である。新刊の第二巻までが出揃っている。一つの新聞は博士がその死の数日前までに、自叙伝全巻の執筆を完結していたと報じている。ぜひそうあって欲しいと思う。またそうあればならぬ。「An accomplished scholar」とは博士を評価する際、きまって使われる言葉だ。学問的に、また人間的に自己を完璧までに仕立て上げた人間という意味で、そういった人の中の自叙伝であってみれば、これが未完のままで終わっていいはずがない。

以下、第一巻の内容・目次を観る。
1. 博士の出生時の家庭環境、祖父母への追想（pp. 1～72）
2. その幼年時代の諸経験・諸体験（pp. 73～226）
3. 博士の学問時代・勉学の場所であったAssumption校での学園生活と学習環境、同僚の教え子追想、始めた読書経験とその後の書物編集、学校生活への絶望と独学への志向 etc.（pp. 227～433）
4. 附録、ダムロン親王追憶（pp. 437～506）
5. 巻末事項索引（pp. 507～509）巻末人物索引（pp. 510～513）

以下、第二巻の目次及び内容
1. 学園生活への訣別、職業経歴、オリエンタル・ホテルの従業員時代（pp. 1～92）
2. 税関に入り、役人生活の描写（pp. 93～128）
3. 独学時代（pp. 129～181）
4. 往時のバンコク回想、タイ各地周遊の思い出（pp. 182～296）
5. 再び役人生活の描写（pp. 297～371）
6. 役人生活との訣別（pp. 372～378）
7. 巻末事項索引（pp. 379～381）巻末人物索引（pp. 382～385）
に支障なきを心から願うと共に、自叙伝発行の完結努力を、出版元である Samnakphim Sukkrit Sayam に頭を下げてお願いする次第である。

博士の著作の邦訳本としては「タイ農民の生活」河部利夫教授編訳、アジア・アフリカ言語・文化双書 No. 1 がある。博士の思想とその独自の学問の体系については、(1) 森幹男 "Chiwit lae Ngan khong Sathienkoset, P. Trinarong" (民族学研究 Vol. 29, ii 185)
(2) 森幹男 "Phya Anuman 博士を追悼する" (AA 言語文化研究所 通信) などの紹介記事があり、それをまたここで繰り返す気はない。ただ次の諸点については、今一度、強調しておきたい。

(1) 博士の死後、その偉大さがあらためて再評価されはじめている。博士の死によって生じた学問的空白を埋める作業は、ほとんど絶望的である。少なくとも同世代人は、これを放棄している。

(2) 博士の学問は、人文科学界の多分野にわたっている。その学問には理論的裏付けがないとの評価はある程度正しいが、タイ人文科学のパイオニアとして博士の到達・達成した境地は、唯一独特のものであり、従来の細分化された専門領域における理論的研究を顔色ながらしめている。

(3) 博士はタイ文化研究にあたり、その主題・対象にタイ的観点から接近し、観察し、そして結論した。タイ人研究者やのタイ文化研究が世界的に通用するためには博士の如きタイ伝統基盤依存が唯一最善の方法であることが理解されはじめている。

(4) 博士の業績は、人がその知的探求心、実証精神、Humanism をもって成し遂げる一つの頂点を示している。

(5) 博士は生前から一部の人間としてよりは、むしろタイ学問社会の良心・英知の表象として存在していた。死後の博士が急速に忘却の人となることは考えられない。博士は本書第一巻の終末を次のフランクリンの言葉で結んでいる。

“死んでのち、すぐに忘れられてしまう人間になりたくなければ、読むに足る書物をしるせ。それがいえならば記すに足る事を行へ。二つにひとつだ” (Vol. 1, p. 506)

(6) タイ国立図書館内、Phya Anuman Room の中央に飾られた博士の胸像は、タイ学問精神の良知として、永久にその光芒を放ち続ける事であろう。 (1969.7)

追記：その後、次の書物が出版された。
5. 私のみなら Anuman 博士 1969. 12. 18 pp. (無料配布本) 以上
(森幹男 1970. 6)